

田中太一

Taichi TANAKA

長谷川明香

Sayaka HASEGAWA

語彙概念構造と事態把握—宮腰理論の批判的検討—

Lexical Conceptual Structure and Construal: A Critical Assessment of Miyakoshi's Theory
of Sentence Meaning

本稿は、長谷川(2023)を発展させるかたちで、宮腰(2020, 2021, 2022, 2023など)による個別の構文の意味分析、および、その背後にある事態把握の指向性に関する主張を批判的に検討する。宮腰の理論では、日本語の受動文、受益副詞構文、結果構文、テシマウ構文など、様々な構文において観察される特徴が、日本語の経験主指向性(experiencer-oriented)の反映であると主張されている。一方、日本語と対比される英語は、結果構文などの振る舞いから、行為主指向性(agent-oriented)の強い言語であるとされる。しかしながら、その分析には疑問が残る部分も少なくない。

2節ではまず、語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure : LCS)を用いた宮腰理論を概観する。そのうえで、3節では、宮腰が受動文分析で着目している起点項・原因項の格標示の変異を観察し、記述レベルでの誤りがあることを指摘する。4節では、テシマウ構文に関する宮腰(2023)の分析を取り上げ、目的とされている多義構造の適切な把握が達成されていないことを明らかにする。5節の前半では、宮腰理論の根幹をなす概念である「経験(主)」や「EXP関数」が適切に定義されていないために、理論的な問題が生じてしまっていることを確認する。最後に、5節後半では、宮腰理論の意味分析で利用される現状のLCSでは、宮腰が重要視する指向性・事態把握モードを十分に反映できず、結果として、言語使用の際の事態把握に十分な注意を払われない理論となってしまうことを示す。

言語コミュニケーションとは、話し手が言語的手がかりを介して、言語とは(一定程度)独立に把握した対象へと、聞き手の注意を向ける過程である(その際、聞き手もまた話し手の意図を把握していなければならない)。事態把握と言語表現の関係は、このような全体像のもとではじめて十全に特徴づけることができる。言葉の意味は単一のLCSには収まらないものなのである。

1. はじめに

本稿の目的は、長谷川 (2023) を発展させるかたちで、宮腰 (宮腰 2020, 2023, Miyakoshi 2021, 2022 など) による一連の研究を取り上げ、英語は行為主指向 (agent-oriented) であるが、日本語は経験主指向 (experiencer-oriented) であるという主張を批判的に検討することである。具体的には、①記述レベルでの誤り、②説明レベルでの不十分さ、③説明概念の不明瞭さを指摘し、それらが全て言語使用の際の事態把握に十分な注意を払っていないことの帰結であることを示す。

2. 宮腰理論の概要¹

宮腰幸一氏の最近の一連の研究²では、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure : LCS) を用いて日英語 (特に日本語) の様々な構文の意味を詳細に分析するとともに、事態把握の選好の観点から各構文の振る舞いの違いを解明することが目指されている。LCSは、語彙項目の辞書的意味を、基本的意味単位に分解することによって表記するものであり、生成文法のパラダイムに属するR. Jackendoffらの概念意味論 (Conceptual Semantics) において用いられる道具立てである。その点で、宮腰の研究は基本的に生成文法の伝統に位置付けられるものと言えるが、以下で見るように、事態把握を重視する機能主義的傾向を強く有することが特徴である。

宮腰は、英語は行為主指向的で日本語は経験主指向的であり、個別の構文的相違はその指向性の違いに起因する、という非常に大きな主張を展開している。宮腰の分析では、様々な理論の道具立てが複雑に絡み合っており、その全体像は未だ明確には示されていない。そのためここでは、全体を一望するのではなく、本稿で関係する点を個別に取り上げることで導入としたい。

Miyakoshi (2022) は、日英語の結果構文と受動態を考察し、動詞が語彙的に認可する受影主 (patient) だけでなく、語用論的に認可される受影主まで許容するかどうかという点に着目して、表1で示するような鏡像関係を指摘する。さらにそれらは、上述の指向性の表れであるとされる。

- | | |
|---|-----------------------------|
| (1) a. He dyed my hair black. | (Miyakoshi 2022 : 206) |
| b. He cried his eyes red. | (Miyakoshi 2022 : 234) |
| c. He drank me under the table. | (Miyakoshi 2022 : 206) |
| (2) a. 彼は私の髪を黒く染めた。 | (Miyakoshi 2022 : 208) |
| b. *彼が目を赤く泣いた。 | (Miyakoshi 2022 : 234) |
| c. *彼は私をペロペロに飲んだ。 | (Miyakoshi 2022 : 208) |
| (3) a. The vase was broken by him. | (Miyakoshi 2022 : 207) |
| b. I was hit by him. | (Miyakoshi 2022 : 207) |
| c. *I was { hit the face / torn the shirt / hit the child } by him. | (Miyakoshi 2022 : 228, 234) |
| d. *I was cried by the child. | (Miyakoshi 2022 : 207) |
| (4) a. 花瓶が彼{によって/に}割られた。 | (Miyakoshi 2022 : 208) |
| b. 私は彼{に/から}殴られた。 | (Miyakoshi 2022 : 208) |
| c. 私は彼に{顔を殴られた/シャツを破られた/子供を殴られた}。 | (cf. Miyakoshi 2022 : 230) |
| d. 私は子供に泣かれた。 | (Miyakoshi 2022 : 208) |

受影主は結果構文では目的語位置に、受動態では主語位置に生じる³。表1の②分裂受影主 (Split Patient) とは、たとえば、(1)bの“he - his eyes”や(4)cの「私 - 顔」のような、広い意味での「持ち主 - 持ち物」関係を意味の基盤とし、それを、主語と目的語に分けて表示する場合のことである (受動態では「所有受動」「持ち主の受身」などと呼ばれる類に相当する)。表全体を見ると、英語は、目的語の範囲が

表1. 日英語の結果構文と受動態における受影主の種類⁴

言語： 受影主 構文 のタイプ	英語		日本語	
	結果構文	受動態	結果構文	受動態
①語彙的に認可される受影主	(1) a: OK	(3) a-b: OK	(2) a: OK	(4) a-b: OK
②分裂受影主	(1) b: OK	(3) c: *	(2) b: *	(4) c: OK
③語用論的に認可される受影主 (談話的受影主)	(1) c: OK	(3) d: *	(2) c: *	(4) d: OK

結果構文では広いが、受動態で主語になるものは語彙的に認可される受影主に限られる。一方の日本語は、その反対で、結果構文は非常に保守的であるが、受動態は様々な種類の受影主を許容する。

どうしてこのような鏡像関係が成立するのだろうか。結果構文は主語(の指示対象)の行為の結果、目的語(の指示対象)が変化を被り、ある状態へと変化することを表す。これは行為主に着目し、その行為を述べる文の一種であり、その使用が英語において「通常」の動詞の範囲(語彙的受影主)を超えて広く観察されることは、行為(主)への指向性が高いことによると説明される(Miyakoshi 2022 : 236など, cf. 宮腰 2014 : 73)。一方、受動態は(典型的には行為の対象であり、かつ変化する個体である)「受影主」を中心に語る文の一種であり、日本語においては、①受影主だけでなく、②分裂受影主、③談話的受影主にまで拡張して用いられる。①の中でも宮腰が典型だと考えるものは、受影主が有生物、すなわち、「経験主」でもある事例であり(Miyakoshi 2022 : 236など, cf. 宮腰2020 : 73)、この特徴は②③の拡張事例においてもあてはまる⁵。宮腰は、典型事例と拡張事例の主語が共通して有する「経験主」という意味役割に着目し、日本語の経験主指向の反映として受動態の広がりをつまえることを試みている。

以下では、日本語の受動態を扱った論考である宮腰(2020)と Miyakoshi (2022)から、重要な論点のいくつかを紹介する。まず、前述の通り、日本語の受動態は有生物主語(すなわち、ある種の経験主)がその用法の広がり的大部分を占める。英語との際立った違いとして、この点に着目し、これらが「経験主受動」と呼ぶべき類を形成していると宮腰は主張する。すなわち、宮腰理論では、受動態は「受影主受動」と「経験主受動」に大別され(それぞれの例文およびLCSを(5)・(6)と(7)・(8)・(9)・(10)に示す)、日本語は経験主指向であるために後者の範囲が著しく広いということになる。経験主受動のLCSは複雑であるが、(8)を例にとると、 $\Sigma^{\alpha}_i \text{EXP}$ に後続する2段の構造のうち、上段では、行為の対象となり変化を受けたこと(受影主としての側面)が表示されている。一方の下段は、ある者がある感覚・感情を抱くことが示されている。そして上位項ではこの2段がまとめられ、EXP関数がそれぞれにかかることで、「 $\langle \Sigma$ がUからコトを受ける \rangle と \langle その結果として Σ がRを感じるようになる \rangle の両方」(宮腰 2020 : 128)が表されることになる。(8)・(10)では経験主が受影主を束縛している。

- (5) a. The vase was broken by him. (= (3) a)
 b. I was hit by him. (= (3) b)
 c. 花瓶が彼{によって/に}割られた。 (= (4) a)

- (6) $[[\beta \text{ ACT-ON } \alpha]^{\epsilon} \text{ CAUSE } [Y^{\alpha}_i \text{ BECOME R } [\text{BY}:\epsilon \text{ U}^{\beta}_k]]]$ 受影主受動
 (宮腰 2020 : 129)⁶

- (7) 私は彼{に/から}殴られた。 (= (4) b)

- (8) $\left[\begin{array}{c} \Sigma^{\alpha}_i \text{ EXP} \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \left[\begin{array}{c} [[\beta \text{ ACT-ON}^{\delta} \alpha] \text{ CAUSE } [\alpha \text{ BECOME R}^{\rho}]] [\text{FROM}:\delta \text{ U}^{\beta}_k] \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right] \right]$ 経験主受動
 (宮腰 2020 : 130)

- (9) a. 私は彼{に／から}顔を殴られた。 (≡ (4)c)
 b. 私は彼に子供を殴られた。 (⊂ (4)c)
 c. 私は子供に泣かれた。 (= (4)d)

- (10) a. $\left[\begin{array}{l} \Sigma_1^\alpha \text{EXP}_1 \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} [[\beta \text{ ACT-ON}^\delta \alpha's Z_j] \text{ CAUSE } [\alpha \text{ BECOME } R^p]] \text{ [FROM:}\delta U_k^\beta] \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right]$ 経験主
所有受動₁
- b. $\left[\begin{array}{l} \Sigma_1^\alpha \text{EXP}_2 \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} [[X_k \text{ ACT-ON } \alpha's Z_j] \text{ CAUSE } [\gamma \text{ BECOME } R]]^p \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right]$ 経験主
所有受動₂
- c. $\left[\begin{array}{l} \Sigma_1^\alpha \text{EXP}_2 \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} [X_k \text{ ACT}]^p \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right]$ 経験主
間接受動

(宮腰 2020 : 133)

また、例文とそのLCSから分かるとおり、日本語には受影主受動と経験主受動の両方が存在しているのに対し、英語は受影主受動のみを有すると宮腰は主張している。つまり、(5)bのような、「経験主」と呼んでよさそうな有生物が主語に來ている文であっても、経験主受動とは分類されないのである (cf. 長谷川 2023 : 113-114)。

次に、宮腰の受動態分析において重要な役割をもつ、起点項と原因項の格標示の分布を確認する。経験主受動のLCSにおいてFROM関数で表される起点項は、(11)の通りカラ、ニ、ニヨッテ格で、受影主受動のBY関数で示される原因項は(12)の通りニ、ニヨッテ、デ格で標示される (宮腰2020 : 5節)。この段階的変異をまとめたのが表2である。

- (11) a. (私は)彼{から／に／*によって／*で}見られた。
 b. (私は)彼{から／に／によって／*で}殴られた。
 c. (花子は)彼{*から／に／によって／*で}殺された。 (宮腰 2020 : 140をもとに作成)⁷
- (12) a. 花瓶が彼{*から／に／によって／*で}壊された。
 b. 落葉が強風{*から／に／によって／*で}巻き上げられた。
 c. ドアがこの鍵{*から／*に／によって／*で}開けられた。 (宮腰 2020 : 140)

表2. 日本語受動の格標示体系と段階的変異⁸

意味形式	<起点>	<行為主>	<原因>	<道具/手段>	
カラ	(11a)				経験主受動
ニ		(11b) (11c)			
ニヨッテ			(12a)		受影主受動
デ			(12b) (12c)		

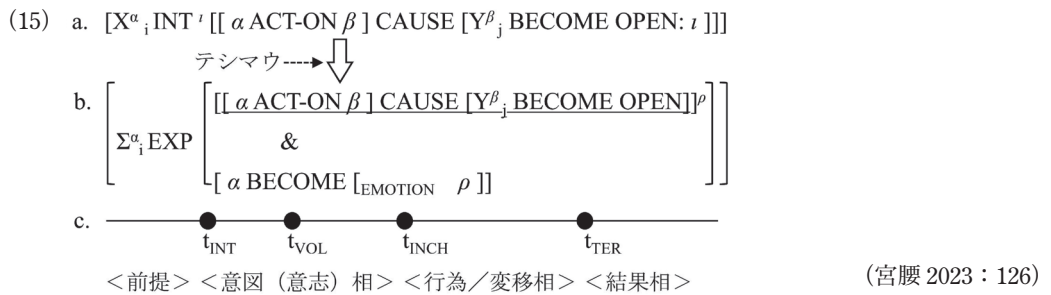
ニとニヨッテを中心として、経験主受動ではカラに、受影主受動ではデに格標示を広げた分布となっている。

宮腰の他の論考であるMiyakoshi (2021)、宮腰 (2023) ではそれぞれ、(13)のような受益の意味を表す副詞表現を伴った日本語の他動詞文、(14)を基本的タイプの事例とするテシマウ構文を扱っている。こ

ここでは詳細な紹介は割愛するが、両者ともに受動態の場合と同様に、日本語の経験主指向の反映であると分析される点はおさえておく必要がある。

- (13) a. 私はステーキを美味しく食べた。 (Miyakoshi 2021:106)
 b. 彼は論文を興味深く読んだ。 (Miyakoshi 2021:106-107)
 (14) (私は)ドアを開けてしまった。 (宮腰 2023 : 122、下線は原著者による)

(13)は英語には直接的な対応物のない日本語特有の表現であり、使用される副詞は、知覚対象の外的特性だけでなく、経験主(ここでは行為主でもある)が知覚した自身の内的状態(感覚・感情)をも表している。また、宮腰(2023)では、補助動詞テシマウが、行為主指向から経験主指向へと事象タイプを変換する関数であると主張されている。



意図的行為・変化事象を表す「(ドアを)開ける」を例にとると、この動詞は本来的には「<行為主Xが受影主Y(…)を意図的にOPEN状態にする>という意味を持って」いるが、テシマウを付加し(14)のようにすることで、行為の結果とそれがもたらす感情の変化を認識する経験主に着目した経験事象として表現されることになる(宮腰2023 : 126f、LCSは(15)b)。また、受益副詞構文とテシマウ構文の基本的タイプは、ともに、後述する「主体的モードで把握される」事象を表した文でもある。

このように宮腰は複数の重要な構文を分析し、日本語が経験主指向性の強い言語であること、反対に英語が行為主指向性の強い言語である(日本語ほど経験主指向が強くない言語である)ことを主張しているが、こうした言語に見られる指向性は、当該言語がもつほかの事態把握の傾向性と連動しているとされる。ここでは、事態把握のモードについて宮腰の考え方が詳述されている Miyakoshi (2022)を取り上げる。表3を見られたい。

表3. (動的)事象の類型化 (Miyakoshi (2022 : 218)を訳出)⁹

認知システム 指向性	遠心的システム (運動/注意)	求心的システム (知覚/感情)
認識者指向	行為 (行為主指向)	経験 (経験主指向)
非認識者指向	変化 (変化主指向)	

「遠心」とは、行為連鎖の始点から力動的に順行の方向で概念化するモードのことであり、「求心」とは終点から逆行の方向で概念化するモードのことである (Miyakoshi 2022 : 218, 宮腰 2014 : 1)。いずれも神経解剖/生理学に基盤のある用語で、一般的な認知体系(情報処理のモード)と整合的な言語知識の体系が想定されている。宮腰(2023)でも神経科学の知見を援用し、自身の理論の正当性を主張している。

個別言語の種々の特徴の根源を事態把握のモードに求めるアプローチは、認知言語学におけるいわゆる「好まれる言い回し (fashions of speaking)」の研究に広く見られる。その分野を長年牽引してきた池上嘉彦氏は、英語は客観的把握、日本語は主観的把握を好む言語であるという説を提唱している。宮腰

の研究も、そうした研究の蓄積をもとに日英語の指向性を論じる試みの1つとして理解することができる。たとえば、Miyakoshi (2021 : 115)では、池上をはじめとした認知言語学に基づく研究においてしばしば言及される「主體的把握」「客體的把握」の区別を挙げ、前者を「経験主体／話者の視点から出来事を捉えるモード」として規定し、自身の主張に組み込んでいる¹⁰。また、日本語について、経験主受動(および一部の受影主受動)は主體的把握のあらわれであり、話し手の内界(ここでは知覚・認識世界)について述べる機能を持つとしている(宮腰 2020 : 114-115など)。

このように、宮腰理論は、意味表示としてLCSを用いつつも、その分析の説明項は、生成文法が対象とする狭義の文法を超え、談話要素や事態把握のモードといった範囲にまで及ぶ。さらに、その説明の妥当性が、一般的な認知機能(e.g. 神経科学)による知見との整合性に言及することで示される点も特徴である。

3. 記述レベルでの誤り

本節では、宮腰(2020)を取り上げ、記述レベルでの誤りを指摘する。宮腰(2020)は、ともに「所有受動」として分析されることの多い(16)と(17)を比較し、(16)では行為者を「から」で標示できるのに対し、(17)では不自然になることから、「顔を殴られた」タイプは直接受動と同じ単文構造であり、「子供を殴られた」タイプは(基本的には)間接受動と同じ複文構造である(宮腰2020 : 134)と主張する。

(16) 私は彼{に／から}顔を殴られた。〈顔は私の顔という解釈〉

(17) 私は彼{に／?から}子供を殴られた。〈子供は私の子供という解釈〉

このこと自体は興味深い観察ではある。しかし、その意味表示として提示されるLCSを検討すると、意味を適切に分析できていないことが分かる。それぞれ(18)が(16)の、(19)が(17)のLCSである。

$$(18) \left[\begin{array}{c} \Sigma_1^{\alpha} \text{EXP}_1 \left[\begin{array}{c} \left[\left[\beta \text{ ACT-ON}^{\delta} \alpha \text{'s } Z_j \right] \text{ CAUSE } \left[\alpha \text{ BECOME } R^{\rho} \right] \left[\text{FROM} : \delta \text{ U}^{\beta}_k \right] \right] \\ \& \\ \left[\alpha \text{ BECOME } \rho \right] \end{array} \right] \end{array} \right] \quad (\text{宮腰 } 2020 : 133)$$

$$(19) \left[\begin{array}{c} \Sigma_1^{\alpha} \text{EXP}_2 \left[\begin{array}{c} \left[\left[X_k \text{ ACT-ON } \alpha \text{'s } Z_j \right] \text{ CAUSE } \left[\gamma \text{ BECOME } R \right] \right]^{\rho} \\ \& \\ \left[\alpha \text{ BECOME } \rho \right] \end{array} \right] \end{array} \right] \quad (\text{宮腰 } 2020 : 133)$$

ここでは詳細に立ち入ることはせずに、要点のみを確認したい。注目すべきは、(18)・(19)ともに、ACT-ON関数の第二項(すなわち、働きかけの対象)が、 α 's Z(すなわち、話し手が所有する対象)となっている点である。Zは(18)では「(私の)顔」であり、(19)では「(私の)子供」である。宮腰(2020)は、顔を殴るという行為は、顔の所有者に対する行為として把握できるために、(16)では「彼から」という標示が可能である((18)ではFROM関数で表現される)のに対し、子供を殴るという行為は、子供の所有者(すなわち、親)に対する行為としては把握できないために、(17)では「彼から」という標示が不可能である((19)にはFROM関数が存在しない)と述べている。この観察が妥当であるならば、主語の指示対象の身体部位を目的語とし、それへの働きかけを表す述語を用いた所有受動では、行為者を「から」で標示できることになる。しかしながら、(20)や(21)では、宮腰(2020)の枠組みでは、(18)として分析されるはずであるにもかかわらず、「彼から」を用いるのは不自然であろう。

(20) 私は彼{に／?から}足を踏まれた。

(21) 私は彼{に／?から}腕を折られた。

この違いは、述語が表す出来事が、主語の指示対象(全体)への直接的働きかけを含むかどうかによるものと考えられる。つまり、(16)は「私は彼から殴られた」という出来事に、具体的な部位の指定を加えたものであるために、「彼から」という標示が自然なのに対し、(20)・(21)では、「私の足」や「私の腕」が働きかけの直接的対象であるために、「?私は彼から踏まれた」、「?私は彼から折られた」などと表現することは不自然なのである。

実はこのような考え方は、宮腰(2020)による(22)の説明と整合的である。宮腰は(23)として引用したLCSを提示し、子供を褒めることは、その親を褒めることでもあるために、「彼から」という標示が可能なのだと論じている。すなわち(22)は、「私は彼から褒められた」という出来事に、具体的な評価対象の指定を加えたものとしても解釈できるということである。ここでは、ACT-AT関数が α (すなわち、親である私)と α 's Z(子供)の両方を項として取ることによってそのことが表現されている。

(22) 私は彼{に／?から}子供を褒められた。〈子供は私の子供という解釈〉

$$(23) \left[\begin{array}{c} W^{\alpha}_1 \text{EXP}_1 \left[\begin{array}{c} [[\beta \text{ ACT-AT}^{\delta} \alpha/\alpha's Z_j] \text{ CAUSE } [\alpha \text{ BECOME } R^{\rho}]] [\text{FROM}:\delta U^{\beta}_k] \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } \rho] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(宮腰 2020 : 135)

宮腰(2020)が身体部位への働きかけについては、 α ではなく α 's Zのみを項として認めたのは、自身の身体への働きかけであれば、その変化を経験することは自明だからであろう。しかしながら、身体部位であっても所有者との関係は一定ではなく、概念化主体の捉え方によって様々に変化するのである。この点を捉え損なった意味分析は不正確なものに留まると言わざるを得ない。

4. 説明レベルでの不十分さ

本節では、宮腰(2023)による、日本語の補助動詞テシマウの分析を検討し、説明レベルでの不十分さを含むものであることを示す。

4.1. テシマウ構文の基本的タイプ

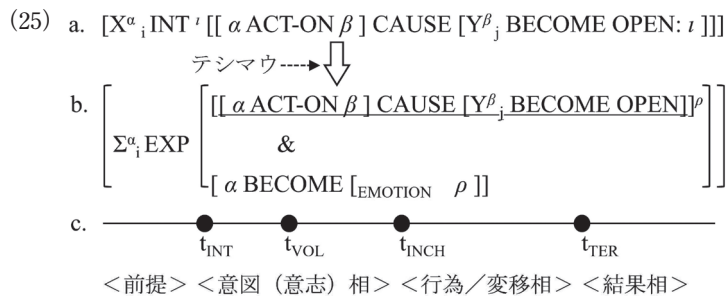
宮腰(2023 : 123)は、日本語の補助動詞テシマウの様々な用法を分析し、「a. なぜテシマウという1つの形式が、一見異質の、中には相矛盾しているときえ思われる、いくつもの意味で用いられるのか。b. それらに何らかの有機的な関係や共通の本質的特性はないのか。c. 当該テシマウ構文がどの意味になるかはどのように決まるのか」という問に答えることを目指した研究である。この問題を解決するために、テシマウ構文の基本的タイプおよび、派生的タイプが設定される。基本的タイプとは、以下の特徴を持つ構文である。

(24) (i) 基動詞は<意図的行為・変化>事象を表し、テシマウは (ii) そこから<意図>とそれによる<結果>の束縛を取り去り、(iii) 行為主指向から経験主指向へと事象タイプを変換する関数であり、(iv) 主語の意味役割は行為主かつ経験主であり、(v) その指示対象は話者であり、その人物は (vi) 自分の行為の結果とそれがもたらす感情の変化を認識し、(vii) それを主体的モードで把握し、(viii) その感情(を伴う経験事象)を完了形で表出し、(ix) その意味は2つのアスペクト局面の情報照合に基づいて決まる。

(宮腰 2023 : 126)

特に (iii) の経験主指向性については、「日本語文法を特徴づける特性であり、類型論的にも重要である」(宮腰 2023 : 126) とされている。

宮腰 (2023 : 126) は説明のために、(25)a 「開ける」・(25)b 「開けてしまう」を挙げている。「開ける」は、行為指向的な事象タイプであり、行為主が意図的に対象へと働きかけ、それによって対象が行為主の意図した〈開いている〉という状態へと変化することを表している。テシマウが付加された「開けてしまう」は、経験主指向的な事象タイプであり、経験主 (= 行為主) が対象に意図的でない仕方でも働きかけ、それによって対象が〈開いている〉という状態へと変化することと、その出来事に対応する感情の変化が経験主 (= 行為主) に生じるという出来事の両方を、経験主が経験することを表している。経験主指向という特徴付けは、このような感情を認識することが意味に含まれているという点を捉えようとしたものである。上付きの添字は対応する項を束縛することを表している (e.g. (25)a では INT の項である X が ACT-ON の第一項を束縛している)。また、(25)b の Σ は経験者が話し手であることを表現している。下線部は基動詞の意味 (から、意図にかんする指定を取り除いたもの) によって精緻化される e-site である。



(宮腰 2023 : 126)

このモデルにおいて意図は、「行為前に自分で生み出す結果の予測」(宮腰 2023 : 128) として特徴付けられる。たとえば、「開ける」の場合には、「意図(意志)相」における「結果相」段階での予測(すなわち、働きかけの対象が〈開いている〉という状態)が実現するために意図的であると見なせるのに対し、「開けてしまった」場合にはそのような対応が存在しないため、非意図的だということである。このことによって、テシマウ構文の多くが「マイナス」の意味を持つという事実の説明が与えられる。「制御可能な行為の場合には意図と結果が一致するのが基本であり、それらが不一致の場合は〈過失感〉のようなマイナスの感情を感じるようになる」(宮腰 2023 : 128) というわけである。また、基本的タイプ (や、いくつかの派生的タイプ) における意図は、LCS に組み込まれた「語彙的意図」であり、「ドアを開ける」場合に想定しうる、〈部屋に入るため〉や〈換気のため〉などの「談話的意図」とは区別される (宮腰 2023 : 128)¹¹。

宮腰 (2023 : 4節) は、上述の基本的タイプを基に、8つの派生的タイプを特徴付けている。以下では各派生的タイプを網羅的に検討することはせず、本節冒頭に引用した a ~ c の課題が達成されているかどうかという観点から議論を進める。予め結論を述べておくと、a については未達成、b については一部達成、c については判定不能というものである。

4.2. 基本的タイプと派生的タイプによる説明の妥当性

宮腰 (2023) は各派生的タイプの意味を記述し、基本的タイプの意味と比較することを通じて a ~ c の間に答えようとする。派生的タイプが「派生」である以上は、基本的タイプに基づき何らかの過程を経て生じたものと考えられる。ここでは、Langacker (2000 : 4.3節) が挙げる、英語の mouse の例を手がかりとして、派生という過程がどのようなものかを確認する。パソコンの周辺機器である〈マウス〉を呼び表すのに、mouse という語がはじめて使われた段階では、当然のことながら、〈マウス〉を表すのは派生的な用法であった。この派生が可能であったのは、話し手・聞き手が実際に〈マウス〉を目にしているなどの理由で、その意味 (指示対象) が明らかであり、また既に慣習化している〈ネズミ〉という意味によって、その〈マウス〉を (拡張を伴うかたちで) カテゴリー化することができたためである。つまり、この段階での〈マウス〉は新奇な〈ネズミ〉として捉えられていたことになる。その後、mouse によって〈マ

ウス)を表す用法が十分に慣習化すると、〈ネズミ〉との繋がりは徐々に薄れていき、mouseには〈ネズミ〉を表す用法と、〈マウス〉を表す用法が(かなりの程度独立に)存在するとみなされるようになる¹²。宮腰が挙げる派生的タイプはそれぞれが十分に慣習化しているため、この段階に至った用法を念頭に置いているものと考えられる。

このような観点からは、宮腰(2023)による説明はどのように理解できるだろうか。まず注意すべきは、各派生的タイプの「派生度」が、基本的タイプを基準として測られるという点である。このような手続きが有意味なものとなるのは、当該の派生的タイプが基本的タイプから直接に派生している場合に限られる。たとえば、ある言語表現の基本的タイプをAとして、それ以外の「派生的」タイプとしてBとCが存在するとする。BとCがそれぞれAから派生したのであれば、Aとどの点で共通し、どの点で異なるのかを問うことには十分な妥当性がある。一方で、Aから派生したBが十分に慣習化した後に、Bに基づいてCが派生した場合には、AとCを比較し、Cの派生度を導くことに意義があるとは思われない。Cの理解にAが(直接には)貢献していないのであれば、両者の関係を問うことは話者の言語知識の解明には繋がらないであろう。先程のmouseの例を用いるなら、〈ネズミ〉から派生した〈マウス〉が十分に慣習化した後に、マウスと同様の機能を果たす電子機器(e.g. トラックパッド)をmouseと呼ぶようになった場合に、〈トラックパッド〉と〈ネズミ〉を直接に比較し、「派生度」を算出することに正当性があるとは考えられないということである。実際に宮腰(2023)は、それぞれの派生的タイプについて、基本的タイプから直接に派生したものであると示していないため、説明の手続きが妥当性を欠くものとなっている。

更にこのこととの関連で、それぞれの派生がどのような過程として実現したものかが述べられていないという問題がある。本節冒頭でも述べたように、宮腰(2023)は「基本的タイプ」と「派生的タイプ」をそれぞれに分析し、各派生的タイプが基本的タイプとどの点で異なっているのかを明らかにすることで、a~cの間に答えようとする。しかしこれは、4本足の椅子A(基本的タイプ)と3本足の椅子B(派生的タイプ)を比べ、BはAよりも足が1本少ないと主張するようなものであり、本来検討されるべき、AからBが生じた理由およびその過程の追求が抜け落ちてしまっている。このような観測の不在は、宮腰(2023)の様々な箇所の問題を生み出している。(26)は、(最も基本的タイプに近い)第一の派生的タイプとして挙げられた例である。

(26) (私は)ドアを押してしまった。

(宮腰 2023 : 132)

宮腰(2023 : 132)によると、(26)の基動詞「押す」は、〈行為様態〉を表している。そのため、語彙的に指定された結果を持たず、〈意図〉と〈結果〉の照合は、まさにその行為自体が予想したものであったかどうかという観点から為されることになる。「被行為主が位置/状態変化しようとして、その時点後に〈意図〉と実際の〈結果〉の照合がなされ、それらが一致していれば「押した」と、していなければ(たとえば引くつもりであっても何もする気がなかったのに肘が当たった場合でも)「押してしまった」と言える」(宮腰 2023 : 132)というわけである。この主張が正しければ、(26)は「ドア」にも(そして、「私」にも)何の変化も生じていない場合であっても、「私」にドアを押そうとする意図さえなければ、自然に用いることができるはずである。しかしながら、そのような状況で(26)を用いることは極めて不自然であろう。(26)はあくまで、「ドア」(ないし「私」)に何らかの意味での変化が生じて初めて自然に用いられる表現である。この特徴を適切に捉えるためには、やはり、(27)のような基本的タイプに基づき、当該事態がそこからの派生としてカテゴリー化されているという観測が不可欠であろう。

(27) (私は)ドアを開けてしまった。

(宮腰 2023 : 122、下線は原著者による)

(27)において、ドアに生じた変化と経験主(行為主)の意図に不一致が生じているのと同様に、(26)においても、ドアには何らかの変化が生じているのである¹³。

同種の問題はたとえば、(28)が例として挙げられる、第二の派生的タイプにも当てはまる。

(28) 佐藤は料理を残らず食べてしまった。

(宮腰 2023 : 123)

宮腰 (2023 : 132) は、主語が三人称である事例について、他者の心にアクセスし、その意図と結果を照合することができないということを根拠に、「(i) 話者が自分の予測と実際の結果を照合し、それらが不一致であると判断したか (ii) 話者が行為主の視点からその人の意図 (の推測) と実際の結果が不一致と判断したかのどちらかの解釈になる」と述べている。ここで、次のような状況を想定していただきたい。「話し手の娘が一人で部屋の中にいる際に、大規模な地震が生じ、それによって部屋全体が大きく歪んでしまう。外出先から (子供を見守るためのカメラを用いて) 状況を知った話し手は、娘になんとか部屋の外に出て安全を確保してほしいと願うが、一方で、娘の力ではドアを自力で開けることは不可能だろうとも考えている。しかし、娘はドアを開けることに成功した。」この状況では、話し手の予測 (娘はドアを開けられない) と実際の結果 (娘はドアを開けた) に不一致があるため、(i) の解釈のもとで、(29) が自然に用いられることが予想されるが、実際には極めて不自然であり、娘がドアを開けないことが期待されているという解釈になってしまうだろう¹⁴。

(29) #娘はドアを開けてしまった。

予測と結果が不一致であることは、必ずしも「マイナス」の意味を持たない。そのため、(29) の (i) 解釈がマイナスの意味を持つという事実にはさらなる説明が必要となる。派生という過程を適切に捉えるならば、たとえば、(ある種の) 第二の派生的タイプにおける「予測」は、基本的タイプにおける「意図」に準ずるものとしてカテゴリー化され、結果との不一致が悪感情を生み出すものとして捉えられているという説明が可能になる。このように、派生的タイプを分析する際には、それを単独で取り上げるのではなく、どのような用法から、どのような仕方で派生したのかを検討する必要があるのである¹⁵。

最後に、ここまでの議論を踏まえ a ~ c の課題がどこまで達成されたかを診断する。a の間における「なぜ」はこのような派生過程の内実に対する問であり、それが欠けている以上は、a は未達成だと考えられる。また、b における「有機的關係」は a の「なぜ」を各用法に対して明らかにすることを通じて浮かび上がるものであるため、やはり未達成となる (本質的と言えるかどうかはともかく、各用法の共通点は示されているため、全体としては「一部達成」と判断できる)。c については、「当該テシマウ構文の意味は、2つのアスペクト局面 (基本的には<意図相>と<結果相>、いくつかの派生的タイプは<前提>と<結果相>、最も派生的な{8}タイプは<前提>と<意志相>) における情報照合に基づいて決まる」(宮腰 2023 : 135)¹⁶ と述べられている¹⁷。それぞれの<相>にどのような情報が存在し、またそれを照合するというのがどのような過程なのか明らかにならない限り、c が達成されているかどうかは判断ができないため、ここでは判定不能としたい。

5. 説明概念の不明瞭さ

本節では、宮腰が用いる「経験主」という意味役割が概念上の問題を含むものであることを指摘し、さらに、単一のLCSという道具立て自体が大きな困難を抱えていることを明らかにする。

5.1 経験主の概念上の問題

宮腰理論の主張の根幹をなす「経験主」「経験主指向」「EXP関数」とは一体どのようなものであろうか。経験主は極めて混質的な概念であり、説明概念として用いる際には十分な精緻化が不可欠である (cf. 長谷川 2022)。しかしながら宮腰では、その内実が不明確なまま議論が進められており、そのために、その主張の根拠が弱くなってしまっていることを本節で確認する。

経験主 (experiencer, 経験者) とは、しばしば、知覚・心理・感覚をもつ者の役割であると言われ、

Fillmore (2003 [1969] : 151) の定義によると、“the entity which receives or accepts or experiences or undergoes the effect of an action (earlier called by me ‘Dative’)” であるという。以下の例文の下線部が経験主である。その適用範囲は非常に広く、たとえば井上(1976)では(32)の「私たち」をも含めている(下線はすべて引用者による)¹⁸。

- (30) a. われわれが異様な物音に気づいた。 (井上 1976b : 140)
 b. お父さん(に)は、この字が見えない。 (井上 1976b : 140)
 c. 太郎は、自分の頭の悪さを悲しんだ。 (井上 1976b : 141)
 d. 私は、顔がほてって、足が冷たい。 (井上 1976b : 141)
- (31) a. John believed that he would win. (Fillmore 2003 [1968] : 50)
 b. We persuaded John that he would win. (Fillmore 2003 [1968] : 50)
 c. It was apparent to John that he would win. (Fillmore 2003 [1968] : 50)
- (32) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。 (井上 1976b : 66)

宮腰がこうした概念について比較的詳細に論じているのは、宮腰 (2014)である。ほかの論文の関係する箇所もあわせて引用する。

- (33) <経験 (experience)>を基本的な事象タイプの一つとして仮定する。「経験」という用語は、「喜ぶ」や「驚く」のような心理動詞の項の一つが担う主題役割の名称「経験主 (experiencer)」として使われることはよくあるが、本稿はそれを「(自らの<行為>を伴わない)<行為/変化/状態>を知覚・認識する事象」という意味で使用する。そして、まさにその経験(知覚・認識)をする主体を「経験主」と呼ぶが、それは基本的に人間となる(厳密には、多くのタイプの知覚・認識は人間以外の動物でもできるが、社会的な利害に関するスケールの認識までできるのは人間だけであると仮定しておく)。一方、知覚・認識の対象は「(自らの<行為>を伴わない)<行為/変化/状態>」と規定したが、その内部をより細かく分類すると、基本的には「自分に対してなされた<行為>(がもたらす<変化>)」か「自分の内部や周囲で発生した<変化>(の結果<状態>)」のどちらかである。厳密には、運動と知覚の間には複雑な相互作用があるため、<行為>と<経験>は截然と区別できるわけではないが、本稿は後者を「自らの<行為>を伴わない」と限定して特徴づけ、この規定で議論を進める。事象関数と項の関係として言えば、<経験>は関数EXPを核として取り、それが第一項として<経験主>を、第二項として<行為/変化/状態>を取る事象となる。

(宮腰 2014 : 20、下線は引用者による)

- (34) 経験主と把握可能なのは基本的に認識機能を持つ有情物のみである (宮腰 2020 : 132)
- (35) This paper argues that this deferential word [= (-te) itadaki] is the prototypical verb of benefactive adverbial constructions, on four grounds. First of all, and most importantly, it strongly implies that the receiver is grateful to the giver. It thus *lexically specifies* that the subject is an experiencer in two senses: (i) a receiver (one who receives an entity/action) and (ii) a sentient (one who feels gratitude as a result of the giver's action). Furthermore, this experiencer is a patient as well, in the sense that he/she is *positively affected* by the action event. These multiple roles can be described by a double-tiered structure with several binding relations

(Miyakoshi 2021 : 111、下線は引用者による)

これらを見ると、経験主とは「(自らの<行為>を伴わない)<行為/変化/状態>を知覚・認識する有情物」ということになろう。この中の「自らの<行為>を伴わない」という規定が現在の論にも変わらず適用されているとするならば、「経験主かつ行為主」という役割がふられる場合 (e.g. (36)「おいしくいただく」・(37)「(ドア)を押してしまう」)があることはどのように考えるべきなのだろうか¹⁹。

(36) Unspecified Structure of *oisi-ku itadaku*:

$$\left[\Sigma_i^{\alpha} \text{EXP} \left[\begin{array}{c} [[\alpha \text{ ACT-ON } Y_j^{\beta}] \text{ CAUSE } [\beta \text{ GO TO IN } \alpha]]^{\rho} \\ \& \\ [[\beta \text{ BE } [_{\text{TASTE}} \text{ TASTY}]]^{\rho} \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } [_{\text{GRATITUDE}} \rho]] \end{array} \right] \right]$$

(Miyakoshi 2021 : 117)

(37) a. $[X_i^{\alpha} \text{INT}' [[\alpha \text{ ACT-ON } \beta] \text{ CAUSE } [Y_j^{\beta} \text{ BECOME OPEN: } t]]]$

テシマウ ----> ↓

$$\text{b. } \left[\Sigma_i^{\alpha} \text{EXP} \left[\begin{array}{c} [[\alpha \text{ ACT-ON } \beta] \text{ CAUSE } [Y_j^{\beta} \text{ BECOME OPEN}]]^{\rho} \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } [_{\text{EMOTION}} \rho]] \end{array} \right] \right]$$



<前提> <意図 (意志) 相> <行為/変移相> <結果相>

(宮腰 2023 : 126)

(36)・(37)には、「 α が自らの<行為>から生じた変化を知覚・認識する」という側面がある。一方で、「経験(主)」の規定では、「自らの<行為>を伴わない<行為/変化/状態>を知覚・認識する」とされている。「自らの<行為>から生じた変化を自らの<行為>を伴わないものとして知覚・認識する」というのは、矛盾した事態ではないだろうか。1つの名詞句が一見矛盾するような意味役割(主題役割)を複数もつことができるのだとすると、どのような仕組みによってそれが可能になるのかを明確にする必要がある。

また、EXP関数が1つのLCSに複数回登場することもある。(38)・(39)では、受動態とテシマウが、(40)では受益副詞とテシマウが同時に使用されており、EXP関数が2重に適用されることになる。

(38) iPhoneを子どもに誤って落とされてしまった男性から、修理の依頼があった。

(39) 彼は無残にも殺されてしまった。²⁰

(40) そのどれもこれもがおいしいレシピばかりで、本書の撮影中に、きれいな食材のあるスタッフもつついとおしく食べてしまったくらいです。

(『好ききらいがなくなるレシピ』紹介文より、下線は引用者による)

しかし「Aを経験_iすることを経験_{ii}する」とは概念的に「Aを経験する」と何が異なるのか。経験_iと経験_{ii}は質的に異なる経験なのか。宮腰(2014:20)は、EXP関数は第二項として<行為/変化/状態>をとると述べているが、<経験>でもよいのか。「経験主指向」というラベルに実質を与えるためには、少なくともこれらの疑問に答え、経験とはどのような事象なのかを明確にし、そのうえで、様々な事例の分析を示す必要があるのである。

5.2. 単一のLCSによる表示に起因する問題

言語によるコミュニケーションは、「話し手が言語的・非言語的の手がかりを提示することで聞き手の注意を意図した対象へと向ける過程」(田中 2022 : 280, cf. Scott-Phillips 2014)として捉えることができる。ここでの対象とは、話し手・聞き手が言語とは(かなりの程度)独立に把握している(心的)世界に位置付けられるモノおよび関係である(Langacker 2016)。たとえば、話し手が太郎を指さして、「太郎が走っている」と言う場合、聞き手は、指差しおよび言語表現を手がかりとして、話し手が把握しているであろう世界における、《太郎》というモノや、《走っている》という関係を、「太郎が走っている」という言語表現と結びつけた(そして、その場で様々な調整を受けた)意味<太郎が走っている>によってカテゴリー化するということである。このような、いわば二段構えの過程が必要であることは、次のような隠喩の

例からも明らかである。(41)が、周囲を明るくする性格の持ち主を中心に、多くの協力者が集まっている状態を表すのに用いられた場合、「太陽」も「惑星」も天体ではなく、人間を表すものとして(も)理解されなければならない。仮に、あくまで太陽は太陽であり、惑星は惑星であるとしてしか解釈されないのであれば、これは隠喩ではなく、字義通りの発話であることになる。

(41) 1つの太陽の周りに、数々の惑星が集まっている。

隠喩としての解釈が可能なのは、聞き手が話し手の提示した手がかり(すなわち、(41)の発話)とは(かなりの程度)独立に、話し手が把握している事態を了解し、それを(41)と結びついた意味によって捉えているためである。

このような二重性は、宮腰が分析対象とする例にもはっきりと現れている。宮腰(2023:132f)は、(42)における「落とす」は「なくす/失う」とほぼ同義の経験動詞として使われている」と考え、全体として(43)の意味構造を持つと主張している。つまり、経験主である話し手が、財布が自らのもたからなくなるという経験をし、それと対応する感情の変化を被るということを経験するという分析である²¹。

(42) 私は財布を落としてしまった。

(43)
$$\left[\begin{array}{c} \Sigma^{\alpha} \text{EXP} \left[\begin{array}{c} [\alpha \text{ EXP } [\text{WALLET}] \text{ BECOME NOT WITH } \alpha]^{\rho} \\ \& \\ [\alpha \text{ BECOME } [\text{EMOTION } \rho]] \end{array} \right] \end{array} \right] \quad (\text{宮腰 } 2023 : 133)$$

ここから、(42)と(44)は、(少なくとも(43)のように表示されるという点では)等しい意味を持つことになる。しかしながら、両者ははっきりと意味が異なる。たとえば、家に置いておいた財布がいつの間にか紛失した場合に、(44)を用いるのは自然であるが、(42)は不自然である。(42)が自然になるのは、「私」が財布を持ち歩いている場合である。

(44) 私は財布がなくなってしまった。

たしかに、「財布を落とす」ことは、通常は意図的な行為ではなく、その意味で世界において生じている事態としては、「財布がなくなる」ことと等しいと言える部分もある。しかし、(42)はあくまで、その事態が経験主(というより、行為主)の責任によって生じたものであるという捉え方を反映しており、そのため「落とす」という他動詞が用いられているのである(西村1998:4.3節)。

宮腰(2023:133)は、詳細は示していないが、(45)のような「折る」についても(42)と同様に分析できると述べている。おそらく、経験主である話し手が、自身の足が折れるという経験をし、それと対応する感情の変化を被るということを経験するということであろう。

(45) 私は足を折ってしまった。 (宮腰2023:133)

この場合にもやはり、(46)のような自動詞表現との差異が問題となる。宮腰(2023)の分析では、(45)と(46)は意味構造が等しくなることが予想されるが、実際には両者の意味ははっきり異なっている。

(46) 私は足が折れてしまった。

このことは、(47)と(48)の比較から明らかである。気絶している間に何かが落ちてきて骨折した場合など、話し手が何らかの行為を行っているとは考えられない状況の描写として、「足を折る」は不自然だが、「足が折れる」は自然になるのである。これもまた、「折る」があくまで他動詞であり、行為を表していることの反映だと考えられる。

(47) ??意識を失い、身動きが取れずにいる間に(私は)足を折ってしまった。

(48) 意識を失い、身動きが取れずにいる間に(私は)足が折れてしまった。

2節で述べたように、宮腰の一連の研究は、話し手による事態把握のあり方を重視したものではなく、それにもかかわらず実際には、本稿の議論から明らかなように、話し手が事態を捉え、聞き手へと伝達する過程を十分に説明するものとはなっていない。そのことの大きな要因として、LCSという道具立ての位置付けが指摘できる。LCSは事態把握のモードを反映した、文の意味を表示するものとされているが、本節での議論からも明らかなように、言語表現の意味を十分に捉えられているとは言いがたい。これは、「言語とは独立に捉えられている、心的世界におけるモノ・関係」と、「それに注意を向け、カテゴリ化するための構造としての言語表現の意味」を明確に区別することなく、1つの表示にまとめようとしたことからくる難点である。

日本語は経験主指向の事象タイプを表す構文が多いという特徴付けが仮に正しいものであるとしても、そのようなモードで把握された事態の内に、行為主指向の事象タイプに見られる因果的関係が組み込まれていないということにはならない。(宮腰の方針を維持したまま)包括的な意味分析を実現するためには、事態把握と言語表現にそれぞれLCSを割り当てるなど、さらなる改善が必要であろう。

参考文献

- Fillmore, Charles J. (2003 [1969]) Types of lexical information. *Form and meaning in language*, vol.1, *Papers on semantic roles*, CSLI Publications, Center for the Study of Language and Information. 141-173. (初出はF. Kiefer (ed.) (1969) *Studies in syntax and semantics*, Dordrecht : Reidel. 109-137.)
- 長谷川明香 (2022) 「「経験者」という意味役割をめぐって」『東京大学言語学論集』44 : e1-e14.
- 長谷川明香 (2023) 「日英語の好まれる言い回し再考 : Miyakoshi (2022) の批判的検討」『東京造形大学研究報』24 : 107-115.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』東京 : 大修館書店.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・下』東京 : 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. (2016) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. Grzegorz Drożdż (ed.), *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. 23-53.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, Stanford: CSLI Publications. 1-63.
- 宮腰幸一 (2014) 「日本語ヴォイスの統合的・系列的多重構造 : 予備的考察」『論叢 現代語・現代文化』12 : 1-85. 筑波大学.
- 宮腰幸一 (2020) 「日本語受動の類型論」『言語研究』157 : 113-147.
- Miyakoshi, Koichi (2021) Benefactive adverbial constructions in Japanese: A comparison with English. *English Linguistics* 38 (1): 106-126.
- Miyakoshi, Koichi (2022) Discourse patient paradoxes. *English Linguistics* 38 (2): 203-241.
- 宮腰幸一 (2023) 「アスペクト依存ヴォイス関数と経験主指向性」『日本語文法』23 (1): 121-137.
- 西村義樹 (1998) 『第II部 行為者と使役構文』中右実・西村義樹『構文と事象構造』東京 : 研究社、107-203.
- Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking our minds*. New York: Palgrave MacMillan. [畔上耕介・石塚政行・田中太一・中澤恒子・西村義樹・山梨実 (訳) (2021) 『なぜヒトだけが言葉を使えるのか』東京 : 東京大学出版会.]
- 田中太一 (2022) 「言語の「かのように」性について : 能力としての代換」『東京大学言語学論集』44 : 279-293.

註

- 1 議論の都合上、Miyakoshi (2022) を取り上げた長谷川 (2023) の主に2節と内容に重なりがある。
- 2 宮腰の論考には英語で執筆されたものもあるが、議論が煩雑になるのを避けるため、同氏の日本語論文を参考にして、英語で提示された術語であってもできるだけ訳出することとする。枠組みそのものにかんする議論は、宮腰 (2014) およびMiyakoshi (2022) に詳しい。また、日本語の例文でアルファベット表記のものも、読みやすさを優先し、漢字かな表記に変更して引用する。また、例文を提示する際、視覚的な分かりやすさの観点から、引用元にはない記号やスペースを挿入することがある。
- 3 受動態と対応する能動態では、受影主は目的語位置に生起する。
- 4 Miyakoshi (2022 : 209, 234) から一部データを抜粋し再編成したものである。
- 5 宮腰は、語彙的受影主が主語の直接受動であっても、無生物の場合には典型とは考えていない。また、後述するように、正確には、主語(受影主かつ経験主)が話者であり、かつ主体的モードで事態把握された内界表出文であるために、主語が音形化されない場合が典型事例として想定されている(宮腰 2020 : 127など)。
- 6 宮腰 (2020 : 126f. など) では、認知文法 (Cognitive Grammar : R. W. Langacker が創始した認知言語学の一理論) の道具立てであるプロファイル (profile) とベース (base) を援用して、受影主受動と経験主受動の違いを考察している。文のプロファイルとは、その文が記述する事態 (ベース) のなかで、概念化の主体によって注意が向けられる箇所のことである。(6)・(8)・(10) において太字で示されている部分がプロファイルである。(6) 冒頭の β はベースの一部ではあるが、プロファイルに含まれていない。ただし、宮腰が提示するすべての

- LCSに、プロフィールとベースの区別が表示されているわけではない。また、(6)のプロフィールは、Langacker自身の受身の分析とは異なることに注意されたい。
- 7 引用元では、(11)a-bは、丸括弧内の主語が無形名詞であることがproΣによって示され、話者が自分の経験事象として「主体的」に把握・表出した文であると考えられている。(11)cは、主語が話者ではなく「花子」となっているが、引用元でproHが主語に添えられていることから示唆されるように、話者が経験主(=花子)の視点から自分の経験事象として主体的に把握・表出する、すなわち、経験主受動の解釈をとることが想定されている。なお、宮腰(2020:141 注22)では、「(花子は)彼{に/によって}殺された」という文は、経験主受動だけでなく、受影主受動の解釈も取りうるかと述べられている。その場合には「外界で起こった他人の受影事象として客体的に把握・描写」する文であるとされる(宮腰2020:141 注22)。主体的モードでの把握については、後述の記事を参照。
 - 8 宮腰(2020:141)の表「日本語受動の格標示体系と段階的変異：概念的近接性とその形式的反映」から引用するにあたり、表中の例文番号を改めた。
 - 9 Miyakoshi(2022:218)のundergoer-orientedを「変化主指向」と訳してよいのであれば、この指向性に対する扱いは、Miyakoshi(2022)と宮腰(2014)とで異なるように思われる。2022年では表3のように、遠心的システム・求心的システムにまたがる表記となっているが、2014年では、求心的システムの下位に「経験主指向」と「変化主指向」の2種をおく枠組みとなっている(宮腰2014:16-17)。ただし、上で「遠心的システム・求心的システムにまたがる」と述べたが、非情物の場合には、そもそもその2種類のシステムの区別を設けないということなのかもしれない。
 - 10 宮腰(2020)ではsubjective construalとobjective construalにそれぞれ対応するものとして、「主体的把握」「客体的把握」という日本語があげられているようである。一方で、池上は「主観的把握」「客観的把握」という術語を用いる。主体・主観、客体・客観という用語の選択について、認知言語学内部でも様々な考え方があがるが、ここではその問題に立ち入らない。また、宮腰(2014:73)では、池上(1981)の「する」型-「なる」型の類型と対応づけた記述がある。
 - 11 たとえば、教室に入ってきた虫を逃がそうとしてドアを開けたが、その時間は試験中であり、ドアを開けるべきではなかったというような場合の「ドアを開けてしまった」は派生のタイプであることになると思われる。
 - 12 <ネズミ>と<マウス>の繋がりが保持されている程度は、話者によって様々である。たとえば、<マウス>をあくまで新奇な<ネズミ>として捉えている話者は、現在では一般的になったコードレスマウスを<尻尾のないネズミ>の一種として捉えている可能性がある。
 - 13 宮腰(2023)はテシマウ構文における変化を、働きかけの対象にのみ生じるものと考えているようであるが、現実に行為が生じた場合には、行為主もまた何らかの変化を被るのが普通である。ある主体がドアを開ければ、その人は、ドアを開けた人になるのであり、ドアを押せばドアを押した人になるのである。このことは、殺人行為の場合を考えてみれば一層明らかであろう。ただし、その場合であっても対象が何らかの意味で変化したからこそ行為主にも変化が生じるのだと考えられる(ドアを押そうとしても、そのドアに押されたという履歴すら生じないのであれば、そもそもドアを押すことはできない)。
 - 14 「娘にはドアを開ける意図はなく、話者にも映像からそのように判断できる。」という(ii)の解釈であったとしても、不自然になると思われる。
 - 15 同様の問題は、受動文の「派生度」を論じた宮腰(2020)にも当てはまる。
 - 16 {8}タイプとされているのは、「テレビを見るまえに、宿題を最後までてしまいなさい。」(宮腰2023:123、下線は原著者による)のように、「意図的/意志的行為の意向・命令形」(宮腰2023:135)を基動詞としたものである。
 - 17 ここでの「当該テシマウ構文の意味」は意味の全体ではなく、(主として)経験者に生じる何らかの感情のことであろう。
 - 18 Fillmoreは、例文(31)の下線部について、1968年時点ではExperiencerではなくDativeと呼んでいた。
 - 19 丸括弧は随意的要素であることを表しているとも考えられる。
 - 20 「殺された」であれ「殺されてしまった」であれ、そもそも、すでに死んでしまっている人の視点に立って他者が自身を殺す事態を最後まで把握することはできるのだろうか。
 - 21 ここには、5.1節で論じた、経験を経験するという概念的問題もある。